

先月十一日に、ようやく五人目の「日蓮」を身延山久遠寺に尋ね、内村鑑三の『代表的日本人』全員を尋ね終わりました。

「中江藤樹」は、地元でもあり、半日で十分往復は出来るのですが、その内容を知る程に深く学ばせていただきました。究極の生き方である知行合一を、日常生活を通じて実践することを村人に教えました。

「上杉鷹山」を米沢に尋ね、師の細井平洲の教えを忠実に守り、藩の財政を計ったこと、「二宮尊徳」を小田原に尋ね、鋤鋤一本で、疲弊した五百の村を再建したこと、「西郷隆盛」を鹿児島市内外の遺跡の他、奄美大島・沖永良部島も尋ねて足跡を追ったこと等により、日本人としての私自身の骨格ができたように思います。

この代表的日本人は、一八九四（明治二七）年に出版された、英文著作の翻訳であります。明治の時代に日本を世界に紹介するために書かれた名著で、新渡戸稲造の『武士道』、岡倉天心の『茶の本』も、ほぼ同時期に出版されています。

当時の文明の中心は西欧にあり、東洋の僻地には文明は蒙昧であるという空気に抗うために書かれたといえます。

特にこの五名は、世相に迎合しない、独自の世界観・歴史観・死生観を持ち、それが現在いささかも輝きを失っていないのです。

片や、アメリカでは、詐欺師のようなイーロン・マスクが八兆円という天文学的巨額報酬を要求し、実態の怪しいエヌビディアの時価総額が五百兆円を超えるという、およそ資本主義の往き付く所を示唆するアメリカの異形の世界を観るにつけ、もつとまともな、もつと正直な、もつと正当な者が評価されなければ、此の世界は終わりを迎えると思います。

その時に、正しい判断基準を取り戻すためにも、もう一度立ち戻る地点、百三十年前の、我々日本人の叡智に学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

カネ・カネ・カネのガサガサした評価基準から、思いやりや、やさしさ、道義を重んじる国、日本が世界の混乱を治め、世界に道を説く国として、燦然と立ち上がる秋が、来ているのではないのでしょうか。

幸い、我々、日本人には、惻隱の情や、原因を自分に求める心の余裕、何よりも、世界に冠たる皇室を戴くという非常に有利な立場にあります。

この時期だからこそ、親しい仲間たちと、先人を現地に尋ねてみることで、そして、それぞれが、自分のできる範囲で周囲に一燈を捧げていくこと。

世界平和も、その実践からしか実現できないのではないのでしょうか。
令和六年も一年間、大変お世話になりました。感謝です。

今月のポイント

一眼は遠く歴史の彼方を

一眼は脚下の実践へ!!

